

命令・禁止表現の世代別使用

—長野県上伊那郡長谷村の方言調査から—

中村純子

キーワード：命令表現、禁止表現、世代別使用、敬意表現、禁止形の変化

要旨

長野県上伊那地方で命令表現・禁止表現として使われている「-シ」・「-ッシンナ」の世代別使用状況と敬意表現としての意識の有無を、上伊那郡・長谷村の調査を基に報告する。この表現は高年層、壮年層では盛んに使用されていた。また高年層までは敬意表現であるという意識があるが、壮年層では敬意表現としての意識を失っていた。また壮年層で使用されている禁止表現は「-ッシンナ」から「-ナシ」とその形式にも変化が生じている。さらに若年層では命令表現・禁止表現も、ほとんど使用されなくなっている。

1. はじめに

長野県上伊那地方（地図参照）では特色ある方言形式の命令表現「-シ」、禁止表現「-ッシンナ」が使用されている。また禁止表現の新しい形「-ナシ」が「-ッシンナ」に代わって70歳くらいから壮年層によって盛んに使用されている。本稿では、この命令表現・禁止表現の世代別使用状況を長野県上伊那郡長谷村非持（地図参照）¹⁾の調査を基に報告することを目的とする。

「-シ」は敬意表現であり、対等以上の者に向かって軽い敬意と親愛の気持を込めて使う旨が馬瀬（1980：229-230）に記されている。論者（壮年層）²⁾は長谷村に隣接する伊那市富県（地図参照）の出身であるが、内省すると、これらの表現の使用に際して敬意意識はほとんどない。馬瀬の調査から30年以上経った現在、この表現を誰に対して使用するかを調査することによって、命令表現「-シ」、禁止表現「-ッシンナ」、「-ナシ」の敬意表現としての機能に変化がないかも明らかにする。

2. 「-シ」、「-ッシンナ」、「-ナシ」

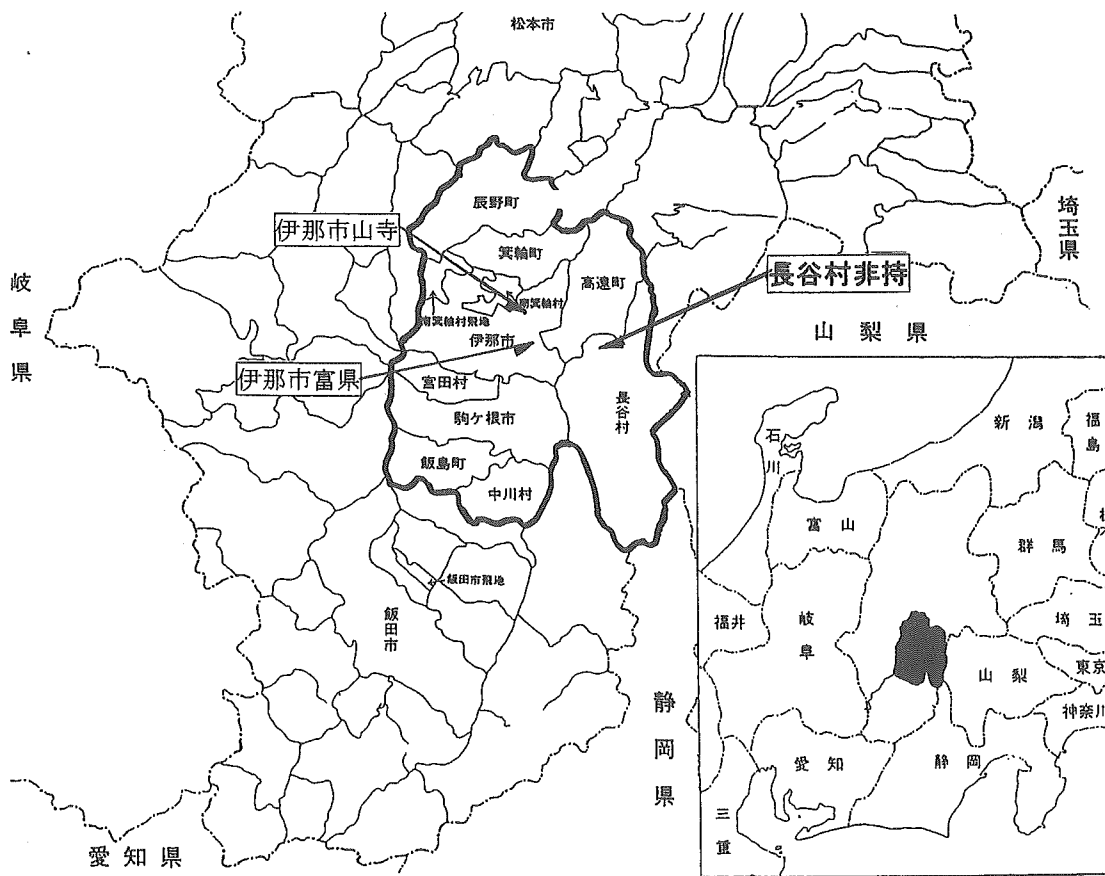
馬瀬（1980：230）によると、「-ッシー、-ラッシー」は命令形である。他の活用形としては禁止形が使われる。この活用形は「-ッシャン、-ラッシャン」であり、終助詞「-ナ」が下接して、イカッシャンナ（行ってはいけません）、ミラッシャンナ（見てはいけません）、コラッシャンナ（来てはいけません）、カセラッシャンナ（貸してはいけません）の

ように用いられる（（ ）内のおよその共通語訳は論者）」とする。また、「-ッシー」、「-ラッシー」はそれぞれ「-シー」、「-ラシー」、または「-シ」、「-ラシ」に、「-ッシャンナ」、「-ラッシャンナ」は「-ッシンナ」、「-ラッシンナ」、または「-シンナ」、「-ラシンナ」と実現される場合もあるという。本稿ではこれらの語形は同様のものとして扱う。

青木（1949：48）は、この「-シ」、「-シャンナ」について「文語の使役の助動詞「せ」、「させ」に敬語の助動詞「れるる」が続いた形の「せられる」、「させられる」の変形と思われる」と指摘している。また江端（1996：180）も同様の指摘している。

また禁止表現の「-ッシンナ」について福沢（1969：110）は、「伊那市山寺（地図参照）では、イカッシンナが使われるが、昭和になると、イカンナッシ（行くな）、トランナッシ（取るな）が使われ出した。これはイカッシンナのシを強めと誤認し、順序を変えて生まれたもので、このとき丁寧語ではなくなった」という。さらに、上伊那地方では、壮年層は「イカンナッシ」から「イクナシ」とその語形が変化している³⁾。動詞の終止一連体形に禁止の「-ナ」が付き、「-シ」が終助詞として使われるようになったものだと思うられるが、これについては稿を改めて論じたい。

【長野県上伊那地方・調査地及び関連地域地図】



3. 調査の概要

以下の要領で調査を行った。

調査日時：2004年12月12日から12月19日

調査対象者：長野県上伊那郡長谷村非持出身者

高年層（70～80才）、壮年層（40～45歳）、若年層（15歳～16歳）、男女各2名ずつ

調査方法：調査票を基にしたインタビュー調査（資料参照）、各30分前後

命令の機能を持つ「早く行カシ」、勧めの機能を持つ「モット食ベラシ」を、「言う」、「（自分は）言わないが、聞いたことがある」、「言わないし、聞かない」の3つから答えてもらった。更に使用するなら誰に対して使用するかを尋ねた。また禁止の機能を持つ「ソソナニ早く行カシンナ」、「ソソナニ早く行クナシ」と「慰め・励まし」機能を持つ「ソソナニ心配シラシンナ」、「ソソナニ心配スルナシ」も同様に「言う」、「（自分は）言わないが、聞いたことがある」、「言わないし、聞かない」の3つのうちから答えてもらった。「ソソナニ早く行カシンナ」、「ソソナニ早く行クナシ」については、使用する場合は、誰に使用するかも尋ねた。使用対象者は、ソトとウチ、更にそれぞれ、同等以上、同等、同等以下、を設定した。具体的にはソトの同等以上は「学校の先生」、「年上の近所の人」、同等は「近所の友人」、同等以下は「年下の近所の人」、「近所の子供」、ウチの同等以上は「親・祖父母」、同等以上または同等以下は「兄弟」、同等以下は「自分の子供」である。インタビューは一人ずつ行い、調査者が質問して、調査票に書き込んだ。インタビューのすべては録音した。

4. 結果と考察

4-1 命令表現「-シ」

4-1-1 高年層の使用

まず、高年層は全員命令表現「-シ」を使用していた。それは命令の機能を持つ「行カシ」、勧めの機能を持つ「食ベラシ」も同様だった（表1参照）。

「-シ」を誰に使うかということについてもほぼ一致している（表2、表3、参照）。まず、命令の機能を持つ「行カシ」については、高1男を除いて「学校の先生」には使用しない。高1女は敬意表現の方言形で、「行カシ」より丁寧な「行ットクンナ」を用いていた。「年上の近所の人」、「近所の友人」、「年下の近所の人」を明確に区別している被験者はいず、ほぼ「行カシ」を使用していたが、高2男は「年下の近所の人」には直接命令表現の「行ケ」を併用している。一方「近所の子供」に対しては、高2女、高1男は「行カシ」、高1女、高2男はより直接的な命令表現である「行ケヨ」、「行ケ」をそれぞれ使用している。ウチの関係の「親・祖父母」、「兄弟」に対しては、ほぼ「行カシ」を使用していた。ただし、高2女は兄弟に「行ケ」を使用していた。これは、ひとつには、それぞれ

の兄弟の年齢差、被験者が兄弟の何番目かということも影響していると思われるが、今回の調査では、そこは明らかにできなかった。「自分の子供」に対しては全被験者、直接的な命令表現「行ケ」を使用している。

次に、勧めの機能を持つ「食ベラシ」だが、「学校の先生」に対してはこの表現は使わず、より丁寧なオアガリ系の表現、共通語的表現の「食ベテクダサイ」を使っていた。ただし高1男は「食ベラシ」も併用している。「近所の人」に対しては、年上・同等・年下に関わらず、「食ベラシ」を使用している。併用形として、より丁寧な表現、「オアガリ」・「オアイ」などがある。「年上の近所の人」、「近所の友人」、「年下の近所の人」を明確に区別しているのは、高2女で、年上には「食ベテ」を併用、同等の友人には「食ベラシ」のみ、年下には「食ベロ」を併用している。全被験者、「近所の子供」になると、「食ベラシ」は使わず、「食ベロ」、「食ベロヨ」など直接的な命令表現を使っている。

「親・祖父母」には全被験者「食ベラシ」を使用していた。高1女は「オアイ」も併用形として用いている。「兄弟」や「自分の子供」になると、「食ベロ」、「食エ」など直接的な命令表現を使う傾向にある。

以上から、「行カシ」、「食ベラシ」は同等以上、同等、同等以下でもソトの人（年下の近所の人）、に対して用いる丁寧な形であることが分かる。子供にはウチはもちろん、ソトの関係であってもほとんど使わない。インタビューで聞いてみると、被験者も「ーシ」はある程度丁寧なことばであるという意識を持っていた。ただし「学校の先生」にはあまり使わないところから、ある程度親しい間柄の、親愛をこめた敬意表現と言える。

命令の機能・勧めの機能を持つ表現とも、「ーシ」を使う相手の傾向はほぼ同じであったが、勧めのほうが、併用形が多種あった。

4-1-2 壮年層の使用

壮年層も命令表現「ーシ」は使用している（表1参照）。それを誰に使用するかについては、「年上の近所の人」、「近所の子供」、「自分の子供」に関して高年層との異同があった（表4、表5参照）。

命令の機能を持つ「行カシ」は、「学校の先生」に対しては全被験者「言わない」としている。壮1女は「命令の表現だから、先生に対しては使えない」と述べている。また同様の理由で「年上の近所の人」に対して、壮1女と壮2男は「言わない」としている。「近所の友人」、「年下の近所の人」に対しては全被験者が使用していた。一方「近所の子供」に対しては、壮1男は使わないとしていた。その理由は「子供には通じない」ということであった。壮2男も「行キナヨ」という共通語的表現を使用している。女性の被験者2名は近所の子供と接触の機会がないので、どのように言うかは分からないようだった。壮1女は「使うかもしれない」とは述べていた。

「親・祖父母」、「兄弟」、「自分の子供」に対して使うのは女性の被験者で、壮1男は「自分の子供」に対しては使わないとしていた。その理由は、「近所の子供」に使用しない理

由と同様、「子供には通じない」ということであった。

次に勧めの機能を持つ「食ベラシ」について、記述する。全被験者「学校の先生」には「食ベラシ」は使わず、「アガッテクダサイ」など共通語的表現を使用している。「年上の近所の人」、「近所の友人」、「年下の近所の人」などには「食ベラシ」を使用している。ただし、壮2男は「年上の近所の人」には「ーシ」は用いないという。女性の被験者は「近所の子供」には接触の機会がないので、どのように言うかは分からないと言いながら、「近所の子供」にもおそらく「食ベラシ」使用すると答えている。壮1男は「行カシ」と同様、「通じない」という理由で、「近所の子供」には「食ベラシ」を使用していない。壮2男も「近所の子供」には「食ベルカイ」を使用し、「食ベラシ」を使用していない。

「親・祖父母」、「兄弟」に対しては、3人の被験者は「食ベラシ」を使用しているが、壮2男は使用していない。「自分の子供」にも女性の被験者は「食ベラシ」を使用すると答えている。壮1男は「近所の子供」と同様、「通じない」という理由で、「自分の子供」には「食ベラシ」を使用していない。

以上のように、壮1男は相手がその言葉を使用するかしないかということが、使用選択の基準となっているようで、「ーシ」が丁寧かどうかということが選択の基準とはなっていない。また、女性の被験者2名も、「学校の先生」を除いて、ウチ、ソト、年上、同等、年下、子供、などに関わらず、ほとんど「ーシ」を使用しており、この表現が敬意表現という意識はない。しかも壮2男、「行カシ」に関しては壮1女も、「年上には「ーシ」は用いない」と述べている。このことから、壮年層においては、「ーシ」は敬意表現であるという意識はほとんどないと考えられる。必然的に「学校の先生」には共通語的敬意表現を用いており、それは命令の機能を持つものも、勧めの機能を持つものも同様であった。

4-1-3 若年層の使用

若年層では「行カシ」、「食ベラシ」を含めて、使用するほうが少なかったが、全員「聞いたことはある」と答えている。「言う」と答えたものは、「行カシ」では若1男、「食ベラシ」では若2男のみであった（表1参照）。

このことから、「ーシ」は若年層において、使用されなくなっていることが分かる。それゆえ、以下、若年層に関する記述は省略する。

表1【世代別命令表現・禁止表現の使用】

	行カシ	食ベラシ	行カッシンナ	心配シラッシンナ	行クナシ	心配スルナシ
高1女	○	○	○	○	△	?
高2女	○	○	○	○	△	△
高1男	○	○	○	○	△	×
高2男	○	○	○	○	○	○
壮1女	○	○	△	△	○	○
壮2女	○	○	△	△	○	○
壮1男	○	○	△	△	○	○
壮2男	○	○	○	△	○	△
若1女	△	△	△	△	×	×
若2女	△	△	△	×	△	△
若1男	○	△	×	×	○	○
若2男	△	○	×	×	△	△

高1女：高年層女性被験者の略である。また1は同年代・同性の被験者の中で年上であることを指す。

2は同様に年下であることを指す。以下同じ。

○：言う △：自分には言わないが、聞いたことがある ×：言わないし、聞かない ?：分からない

表2【高年層・行カシを誰に対して使うか】

	高1女	高2女	高1男	高2男
学校の先生	× 行ットクンナ	× 行ッテネ	○	× 行ッタホーガイイ
年上の近所の人	○ (行カシヨ)	○	○	○
近所の友人	○	○	○	○
年下の近所の人	○	○	○	○ 行ケ
近所の子供	× 行ケヨ	○	○	× 行ケ
親・祖父母	○	○	○	○
兄弟	○	× 行ケ	○	○
自分の子供	× 行ケヨ	× 行ケ	× 行ケ・行ケヤレ	× 行ケ

○：言う ×：言わない ()：「行カシ」ではないが、その類似表現を使ったことを表す。

-：対象者がいないことを表す。「行カシ」以外の表現(含、併用形)はその表現を記した。以下同じ。

表3【高年層・食ベラシを誰に対して使うか】

	高 1 女	高 2 女	高 1 男	高 2 男
学 校 の 先 生	× オアガリ	× 食ベテクダサイ アガッテクダサイ	○ オアガリナ オアガリテ	× 食ベテクダサイ オアガリナ
年上の近所の人	○ オアガリ	○ 食ベテ	○	○ オアイ
近 所 の 友 人	○ オアイ	○	○	○ 食ワシ オアイ
年下の近所の人	○ オアガリ	○ 食ベロ	○	○ オアイ
近 所 の 子 供	× 食ベロヨ	× 食ベロ	× 食ベロヨ	× 食ベロ
親・祖父母	○ オアイ	○	○	○
兄 弟	× 食ワシ	× 食ベロ	○	× 食ベロ
自 分 の 子 供	× 食ベロヨ	× 食ベロ	× 食ベロヨ	× 食ベロ クエ

表4【壮年層・行カシを誰に対して使うか】

	壮 1 女	壮 2 女	壮 1 男	壮 2 男
学 校 の 先 生	×	×	×	×
年上の近所の人	×	○	○	×
近 所 の 友 人	○	○	○	○
年下の近所の人	○	○	○	○ 行ケ
近 所 の 子 供	—	—	×	× 行キナヨ
親・祖父母	○	○	○	○
兄 弟	○	○	○	○
自 分 の 子 供	○	○	×	—

表 5 【壮年層・食ベラシを誰に対して使うか】

	壮 1 女	壮 2 女	壮 1 男	壮 2 男
学 校 の 先 生	× アガッテクダサイ	× アガッテクダサイ	× オ食タベクダサイ	× モットドーデスカ
年上の近所の人	○	○	○	×
近 所 の 友 人	○	○	○	○
年下の近所の人	○	○	○	○
近 所 の 子 供	○	○	×	× 食ベルカイ
親 ・ 祖 父 母	○	○	○	×
兄 弟	○	○	○	× 食ベルカイ
自 分 の 子 供	○	○	×	—

4-2 禁止表現「-シンナ」、「-ナシ」

4-2-1 禁止表現の使用

世代別禁止表現の使用についてみていく（表 1 参照）。

禁止の機能を持つ「ソナニ早くイカッシンナ」、「ソナニ早く行クナシ」と慰め・励ましの機能を持つ「ソナニ心配シラッシンナ」、「ソナニ心配スルナシ」の機能の違いによる使用の差は各年齢層ともほとんどなかった。

高年層は主に「-ッシンナ」を使用していた。ただし、高1女は「-ッシンナ」ではなく、「-ッシャンナ」を使用すると報告している。高1男は「-シンナ」と「-シャンナ」、「-シャンナヤレ」を併用している。高年層被験者は「-ナシ」については、子供たちが言うので、聞いたことはあるようだ。さらに注目すべきは4人の高年層被験者のうち年齢の一番若い70歳の高2男のみ⁴⁾、「-ッシンナ」形と「-ナシ」形を併用していた。ただし、「-ッシンナ」と「-ナシ」では「-ッシンナ」のほうがよく使うということだった。

壮年層は「-ナシ」を使用している。「行カッシンナ」は壮2男が、「使うには勇気がいるが、おじいさん、おばあさんには使う」と述べたのみである。しかし、壮年層は全被験者が自分で使わないまでも、「-ッシンナ」は「聞いたことがある」としている。これは親の世代が使っていたことによると思われる。

それに対し、若年層は「-ッシンナ」、「-ナシ」とも使用していない。「-ッシンナ」は「聞いたこともない」と答えた被験者がほぼ半分いた。「-ナシ」については、「言わないし、聞かない」と答えたのは若1女のみで、若2女、若2男は「聞いたことがある」としている。また若1男は「-ナシ」の形を「言う」と答えている。しかし、この形も若年層の使用がほとんどなかったことから、以下若年層の記述は省略する。

4-2-2 禁止表現の使用の対象者

禁止表現の使用の世代別対象者について述べていく（表6、表7参照）

高年層は、高1男を除き、「学校の先生」には「行カッシンナ」は使用しない。高1男のみ「行カッシンナ」、それにさらに「-ヤレ」のついた「行カッシンナヤレ」を併用している。また全被験者「年上の近所の人」、「近所の友人」、「年下の近所の人」には「行カッシンナ」か「行カッシンナ」を使用している。高1男は更に「行カッシンナヤレ」を併用している。高2男は「年上の近所の人」、「近所の友人」には「行カッシンナ」を使用しているが、「年下の近所の人」には、より直接的な禁止表現である「行クナ、行カンデモイイ」を併用形として使用している。一方、「近所の子供」には全被験者「行クナ」などの直接的な禁止表現を使っている。高2女のみ「行カッシンナ」も使っている。

「親・祖父母」に対しては「行カッシンナ」か「行カッシンナ」を使っている。高1男は更に「行カッシンナヤレ」を併用している。「兄弟」に対しては、女性の被験者は「行カッシンナ」・「行カッシンナ」、高1男は「行クナ」、高2男は「行カンデイージャネーカ」を使っている。「自分の子供」には「行クナ」が主として使用されている。高2男は「行カンデイージャネーカ」を使用するとしている。

高年層は「行カッシンナ」という表現をソト・ウチとも同等以上、同等、また同等以下でも身内以外の人（「年下の近所の人」）に対して使用している。子供に対しては、ソト・ウチとも使用していない。つまり丁寧という意識があることが分かる。実際インタビューで、敬意意識について尋ねると、高2男は「「行カッシンナ」のほうが「行クナシ」より古い言い方で、丁寧である」としている。高2女は「「行カッシンナ」は丁寧じゃないけど、悪い言葉ではない」と言っている。しかし、これも「-シ」と同様、「学校の先生」には使用しない傾向にあることから、ある程度近い関係の中での敬意表現ということができる。

壮年層も「学校の先生」には全員「行クナシ」を使用していない。一方、「年上の近所の人」、「近所の友人」、「年下の近所の人」には、壮2男を除き全員「行クナシ」を使用している。「近所の子供」には、男性の被験者は使用していないが、女性は使用すると答えている。壮1男は「子供には通じない」という理由から、使用していない。

「親・祖父母」、「兄弟」、「自分の子供」には壮1女と壮2女は「言う」と答えたが、壮1男は「自分の子供」には「通じない」という理由で、使用していない。壮2男は「親・祖父母」のみ「行クナシ」に「-ヨ」のついた「行クナシヨ」を使用するようだ。

壮年層は「行クナシ」を「学校の先生」を除く誰に対しても比較的使用していた。つまり敬語としての意識はないと言える。壮1男は「近所の子供」と「自分の子供」には使用していなかったが、これも「通じないから」ということで、丁寧かそうでないかということ意識した結果ではない。壮2男は、「「行カッシンナ」は古い感じだが、昔の人は丁寧だと思って言っているのではないか」と述べていた。それに対し「行クナシ」は丁寧な言葉だとは思わない」と言っている。他の被験者も「行クナシ」に対して、丁寧だという感覚は持っていなかった。

表6 【高年層・行カッシンナを誰に対して使うか】

	高 1 女	高 2 女	高 1 男	高 2 男
学 校 の 先 生	×	×	○ (行カッシンナ) 行カッシンナヤレ	× 行カンデージャーナイデスカ
年上の近所の人	○ (行カッシンナ)	○	○ (行カッシンナ) 行カッシンナヤレ	○
近 所 の 友 人	○ (行カッシンナ)	○	○ (行カッシンナ) 行カッシンナヤレ	○
年下の近所の人	○ (行カッシンナ)	○	○ (行カッシンナ) 行カッシンナヤレ	○ 行クナ 行カンデモイイ
近 所 の 子 供	× 行クナ	○ 行クナ	× 行クナ	× 行カンデージャーネーカ
親 ・ 祖 父 母	○ (行カッシンナ)	○	○ (行カッシンナ) 行カッシンナヤレ	?
兄 弟	○ (行カッシンナ)	○	× 行クナ	× 行カンデージャーネーカ
自 分 の 子 供	× 行クナ	× 行クナ	× 行クナ	× 行カンデージャーネーカ

() は併用形ではなく、類似表現を使ったことを表す。 以下同じ。 ? : 分からない

表7 【壮年層・行クナシを誰に対して使うか】

	壮 1 女	壮 2 女	壮 1 男	壮 2 男
学 校 の 先 生	×	×	×	×
年上の近所の人	○	○	○	×
近 所 の 友 人	○	○	○	×
年下の近所の人	○	○	○	×
近 所 の 子 供	○	○	×	×
親 ・ 祖 父 母	○	○	○	○ (行クナシヨ)
兄 弟	○	○	○	× 急グナヨ
自 分 の 子 供	○	○	×	—

5. おわりに

上伊那地方の特色ある方言形式の命令表現、禁止表現は高年層、壮年層では盛んに使用されていた。また高年層までは近しい間柄の敬意表現であるという意識があったが、壮年層では敬意表現としての意識を失っていた。また壮年層で使用されている禁止表現は「-ッシンナ」から「-ナシ」とその形式にも変化が生じている。さらに若年層では命令表現・禁止表現とも、ほとんど使用されなくなっている。

命令表現・禁止表現は、仁田（1989：7）によると、モダリティ形式として、話し手の聞き手に対する要求の実現を働き掛け、訴えるといった発話・伝達の態度を表す。つまり使用に際して、聞き手に何らかの行為を要求するものである。このような表現では、方言形式が比較的保持される傾向にあると思われた。つまり、方言形式を使用することで、仲間意識を強調することにより、聞き手に対する話し手の要求の実現をよりスムーズに行うことができるのではないかと考えられたからだ。しかし長谷村の若年層においては、ほとんど方言の命令表現・禁止表現は使用されていなかった。今後は「-シ」、「-ナシ」、「-ッシンナ」に関して他の地方でも調査を行い、その分布・使用層・使用意識を明らかにしていきたい。

【謝辞】

この調査を行う上で、信州大学名誉教授馬瀬良雄先生・長谷村教育委員会伊東耕平教育長には大変お世話になりました。また被験者の皆様には忙しい時間をさいて、調査に協力くださいましたことを、ここに心より感謝申し上げます。

注

- 1) 長野県上伊那郡長谷村は南アルプス山麓に位置し、人口2216人（2005年1月1日現在）の村である。調査した大字非持（非持と非持山地域に分かれる・調査地は非持）は長谷村の北方・高遠町に隣接する地域で、人口、922人の地域である。馬瀬（1980）は非持山地点で、1971から1973年にかけて、調査を行っている。長谷村とその近隣の伊那市、高遠町はいずれも行政的には長野県の南信地方に属する。南信地方は大きく諏訪地方と伊那地方に分けられ、伊那地方は下伊那地方と上伊那地方に分けられる。馬瀬に（1992：448）によると、上伊那地方の大田切以北は方言的には中信方言に属するとしている。長谷村とその近隣の伊那市、高遠町は中信方言に属することになる。
- 2) 論者は長野県伊那市富島の生まれ。18歳まで、同所に住み、その後、東京・神奈川・アメリカ・長野県駒ヶ根市を経て、38歳から47歳の現在まで、再び同所に住む。
- 3) 伊那市山寺の近くに住む祖母と同居する壮年層（36歳）の女性に「イカンナッシ」の使用について尋ねると、「聞いたことがない」という答えだった。それに対し「イクナシ」については「使用する」、「イカッシンナ」についても、「柔らかく言いたい時は使う」と答えた。ただ、「自分が普段友人に使用するには「イクナシ」で、「イカッシンナ」は年配の人が使用する言葉だ」という意識があった。論者も「イカンナッシ」は聞いたことがない。この語形の使用は時期的にかなり限られていたことが推測できる。
- 4) 高年層の他の被験者の年齢を記す。高1女：79才、高2女：78才、高1男：80才

参考文献

- 青木千代吉 1949 『信州方言讀本 語法篇』 信濃教育会
江端 義夫 1996 「「シャル」敬語法の分布の新化方向－中部地方域方言について－」
『日本列島方言叢書 8 中部方言考① (中部一般・長野県)』 ゆまに書房
仁田 義雄 1989 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』 くろしお出版
福沢 武一 1969 『区誌 山寺』 区誌山寺編纂委員会
馬瀬 良雄 1980 『長野県上伊那誌民俗編、下』 上伊那誌刊行会
1992 『長野県史、方言編』 社団法人 長野県史刊行会

資料：命令・禁止表現調査票【高年層】抜粋

「～し」

- ①「早く行きなさい」という命令の意味で、「早く行かっし／行かし」という言い方をしますか。

言う 聞いたことがあるが、自分はいわない 言わないし、聞かない

上の表現を次の人に使いますか。

学校の先生 年上の近所の人 近所の友人 年下の近所の人 近所の子供
親・祖父母 兄弟 自分の子供

- ②あなたの家に友達が来ていて、お茶を飲んでいます。「もっとお食べなさい」という勧める意味で、「もっと食べらっし／食べらし」という言い方をしますか。

言う 聞いたことがあるが、自分はいわない 言わないし、聞かない

上の表現を次の人には使いますか。

学校の先生 年上の近所の人 近所の友人 年下の近所の人 近所の子供
親・祖父母 兄弟 自分の子供

他の言い方がありますか。(学校の先生に対して)

「～なし」

- ③「そんなに早く行くな」という禁止の意味で、「そんなに早く行くなし」という言い方をしますか。

言う 聞いたことがあるが、自分はいわない 言わないし、聞かない

上の表現を次の人に使いますか。

学校の先生 年上の近所の人 近所の友人 年下の近所の人 近所の子供
親・祖父母 兄弟 自分の子供

④「そんなに心配するな」という励ましの意味で、「そんなに心配するなし」という言い方をしますか。

言う 聞いたことがあるが、自分はいわない 言わないし、聞かない

上の表現を次の人に使いますか。

学校の先生 年上の近所の人 近所の友人 年下の近所の人 近所の子供
親・祖父母 兄弟 自分の子供

*他の表現をしますか。

「そんなに早く行くな」 _____

「そんなに心配するな」 _____

「～しんな」

⑤「そんなに早く行くな」という禁止の意味で、「そんなに早く行かっしんな／行かしんな」という言い方をしますか。

言う 聞いたことがあるが、自分はいわない 言わないし、聞かない

上の表現を次の人に使いますか。

学校の先生 年上の近所の人 近所の友人 年下の近所の人 近所の子供
親・祖父母 兄弟 自分の子供

⑥「そんなに心配するな」という励ましの意味で、「そんなに心配しらっしんな／心配しらしんな」という言い方をしますか。

言う 聞いたことがあるが、自分はいわない 言わないし、聞かない

⑦「行かっしんな」／行かしんな」と「行くなし」とどう違いますか。

